

ジャンル「カフェー」の成立と普及 (1)

斎藤 光
SAITOH Hikaru

はじめに

カフェーは、大正期・戦前昭和期に日本やその植民地の都市部で広まった、飲食遊行商業空間である。1910年代から30年代にかけてのテキストや表象をめぐりゆく人々には、一定のイメージをもって、思い起こされるものであろう。しかし、そのカフェーをどのように捉えるのか、それをどういう方向と方法で考えて行くのか、また、カフェーに関して何を考えて行くのか、ということになると、明確なアイデアは出ていない。なぜアイデアが明確化されないのか。それは、カフェーに関して、二つの困難な問題があるからと考えられる。

第一は、資料的問題である。大量にあらわれたと思われるカフェー的空間、店・店舗としての各カフェーは、小規模経営のものも多く、存立時期も短かいため、ほとんどは、記録を残さず、記憶にも残らず消えていったようだ。たとえば、比較的記憶には残っていた、京都の新京極にあったカフェーロイヤル¹の場合、記録となると乏しく、研究も一切ない。カフェーロイヤル、あるいは、ローヤルカフェーが京都でどういう意味をもったのか、そうした事柄は分からないまま、場の存在自体忘れ去られ現在にいたっている。要するに、資料が決定的に乏しいのだ。そのためアクセスしやすい資料が例外的に残存したカフェーを中心にした記述や研究が出現する結果となる。つまり、カフェーギオン²やカフェータワー³は、いまでも非在の存在、ないもの・なかったものなのである。

第二は、理論的問題である。カフェーを考える時に、どのような方法でそこにアプローチするか、カフェーについての細かい事柄をどのような図式におさめ理解するのか、カフェーに関する諸断片からどのような図柄を讀解するのか、そういう時の理論が未整備、または、不在なのである。これは、一般的に日本におけるいわゆる飲食店、あるいは、飲食遊行商業空間をどうとらえるかという時の枠組みの不在と関わる。この場でその一般的な枠組み問題に触れる余裕は、残念ながらない。ただ、カフェーの意味をモダン都市におけるトポスとして解明しようとする試み⁴や、カフェをポピュラーカルチャー研究の中で位置づけようという企て⁵があることは確認しておこう。より一般的に現在のカフェに焦点をずらしてであるが、そこを「第三の

空間」と見ることを示唆するエッセイ⁶もある。しかし、多くは理論的考察がおごなりの文学研究、1920年代・30年代研究、個別カフェ研究、都市研究、建築史といったもので、それらに好事家趣味的テキストが多数加わるに過ぎない。

こうした困難があるのではあるが、その困難は自覚化されることがないまま、カフェの歴史についての言説は累積されてきた。また、その蓄積を通して一定のイメージが形となってもいる。しかし、そうした多数の歴史叙述が存在するにもかかわらず、理論の未整備と未整備自体を意識する感覚が麻痺しているのと同様に、歴史記述の構造や形態を捉えかえそうという問題意識は生まれていないように見える。むしろ、いかに諸資料から、カフェに関する記録や記憶をきれいに切り取り、それをそれなりにもっともらしく配置していくかが、目指されているように感じられる。とはいえ、これまでの歴史叙述を概観することは、必須の事項であろう。そこからは、三つの傾向を読みとることができるだろう。

第一は、物質・資源としてのコーヒーを中心に考えるという傾向。第二は、19世紀末に欧州にあったカフェを起源として、または、模型・モデルとして考えるという傾向。そして第三は、日本でカフェを標榜したもの、カフェを名乗った空間を軸に考えるという傾向である。最後のものは、無自覚にはあるが、人々からカフェと認知され名指された個別店舗・空間を含む場合もある。

この三つの傾向は、互いに対立軸や論争点をつくったりはしていない。そのため記述を先鋭化したり深化したりするということはほとんどなされない。それどころか一つのテキストの中で、矛盾を抱えながらもそれが自覚化されずに共存している場合がほとんどである。問題とされてきたのは、日本で最初にカフェを名乗った店はどこかというトピックや、日本で初めてカフェの内実を持った店はどこか、といったことに過ぎない。あるいは、そうしたものは、どの都市や地区で初めて生じたのかという疑問くらいだ。ある意味、瑣末な問題と言えよう。⁷

この論文では、こうした三つの傾向とは異なる視点を提示することを試みたい。詳しくはのちほど展開するが、どのような視点でカフェを捉えるかを、あらかじめ少し示しておこう。

ここでは、カフェを「飲食物と関連サービスを提供し消費者が基本的にはその場でそれらのモノとサービスを消費する商空間（飲食遊行商業空間）についての共同化された社会的なジャンル・カテゴリー」の一例と捉えて行く予定だ。言い換えれば、日本語文化圏における飲食店のジャンル、あるいは、遊行空間のジャンルとしてカフェを見る、ということである。ジャンルと捉えた上で、そのジャンル・カテゴリーを成立させる諸コンテンツや、他ジャンル・カテゴリーとの差異・位置関係や、そのジャンル・カテゴリーをめぐる諸言説の交差を再構成しつつ、その交差圏が巻き起こした事柄（出来事側）と、その交差圏が生み出す気分・感性・スタイル（主体側）を、考察する方向性を示したい。また、そのジャンル・カテゴリーが置かれる都

市や社会という文脈とジャンル自体との相互関係性について分析する射程もできれば確保したい。ただし、本稿で焦点化する時代は、1910年代前半ということになる。大きな見通しとしては戦前期を見渡すよう試みるが、詳しい記述は10年代前半についてであることをあらかじめお断りしておく。

ところで、これまでの歴史叙述に内在する三つの傾向を指摘したが、三つの傾向があるにもかかわらず、戦前日本のカフェーについての歴史記述は、ある種のパターンに収まる。初め、個別店舗史として記述され、その後、重要な出来事を時間軸上に順序づけるというやり方をとる。また、地理的意味での銀座をカフェー展開の舞台とする「正史」が成立している。大体のパターンを年表風に示すと以下のようになるだろう。⁸

表1：戦前日本のカフェー史記述のパターン

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・1888年（明治21年）4月、鄭永慶が「可否茶館」を開く ・1897年あたりから、本郷「青木堂」が存在 ・1898年、東京市には69軒の「喫茶店」が存在 ・1900年前後、「本郷カフェー」が登場 ・1910or11or12年、川口居留地（大阪）に「カフェー・キサラギ」開業 ・1911年4月ころ、東京で「カフェー・プランタン」開店（銀座） ・1911年8月、東京で「カフェー・ライオン」開店（銀座） ・1911年12月、東京で「カフェー・パウリスタ」開店（銀座） ・1923年9月1日、関東大震災。この後、カフェーが全国的に激増 ・1920年代末、大阪カフェー資本の東京進出 ・1930年代半ば、純喫茶の分離 ・1940年頃、戦争の深化による生活面の統制に伴い衰退 |
|--|

具体的な記述では、吉見俊哉のものが典型である。

「女給を備えて酒を飲ませるといいうわゆるカフェーが、銀座に姿を現すのは、明治四十四年三月に開店したカフェー・プランタンが最初である。これはヨーロッパのカフェーをモデルに松山省三ら芸術家たちが始めたもので、同時代の文学運動とも結びついた知的サロンともいうべき空間であった。その後、同年八月にはカフェー・ライオンが尾張町の角に現れ、次第にカフェーは談論の場としてよりも女給のサービスを受ける場としての性格を強くもつようになる。そして震災後、カフェーはまさに大衆の娯楽機関となり、同時に女給の性的なサービスも露骨になって行く。銀座においてこの動きに先鞭をつけたのはカフェー・タイガ

アだが、ほかにもサロン春、クロネコ、ゴンドラ、バッカスなどのカフェが次々に進出し、銀座は一気にカフェ乱立時代に入っていく。とりわけ昭和になると、京橋寄りの一帯を中心に大阪方面から露骨な性的なサービスを売物とするカフェが林立し、エロ・グロ・ナンセンスと呼ばれる時代の一潮流を担っていく… (略) …」⁹

こうした「正史」風の日本カフェー史には、よく見ると4点からなる記述上の特色がある。^{10 11}

第一は、カフェーの展開を、文化サロンの「空間」から大衆的「空間」への変容と認識し、そのように記述している。ただ、どの時点から「大衆化」が始まると捉えるのかについては意見の相違がある。しかし、特に論争になっているわけではない。

第二に、飲食中心「空間」からエロ的・性的「空間」へと変貌した、と認識し記述している。この場合もいつからか、ということが問題であるが、意識的にその点を突き詰めるという論考は非常に少ない。また、何をもって「エロ」とし「性的」とするのかについても明確にされているわけではない。

第三に、カフェーというものに1920年代後半あたりで分化が生じ、二極化した、と定式化している。別の表現をすれば、喫茶店というものが析出され、カフェーと喫茶店という二極分化が進んだ、ということだ。この場合ジャンルという視点と関連するが、その点に気付いている考察はない。

最後に、第四点として、「正史」展開の主潮流は東京と大阪という二つの中央にある、という認識が前提とされている。この時、重点はやはり東京に置かれ、特に銀座が中心とされる。あまり事例はないが、他地域での展開は、中央の再演形、または、せいぜい特殊形とされるようだ。面白いことに大阪のカフェーを記述する場合、地域中心主義的なイデオロギーやパッションが漂う場合が多いが、これも重要な問題ではない。

「大衆化」「エロ化」「二極化」という三つの変容では、「女給」の存在が関係した、とされる。大衆化したのは、大衆が「高級」な文化に引かれるのではなく、「女給」の色気や性的側面という「低俗」性に引きつけられるからだ、と見なされるし、その場合、飲食することは背景に退く。「エロ」サービスこそが、カフェーの商品の中心となり、「女給」こそが消費の対象となった、とされるのだ。これに対して、「女給という商品」とは異なる商品をカフェー的空間に求めていた人々のために、喫茶店というものができて来る、カフェーの二極分化が進行する、と図式化されている。「女給」とは特殊カフェー的現象である、という思い込みが、当時のカフェー利用者などにあつたし、無批判な研究者もその思い込みを事実のごとく素朴に受け入れている。ただ、この点は指摘するにとどめておこう。そして、これは蛇足だが、この「女給」的「エロ」性の起源とされるのが、関西、大阪であり、決して銀座ではない、これも興味深い

事象である。

さて、ここまででも分ると思うが、この歴史記述にはジャンルという概念が秘かに導入されている場合もある。特に二極分化、喫茶店の析出を見る場合がそうである。しかし、自覚化されてはいない。つまり、ジャンルという視線でカフェー史を一貫して見るという姿勢はない。他方、このエッセイでは、むしろカフェーを一貫してジャンル・カテゴリーとして扱う。そして、そこから何が見えてくるか、見えてくる可能性があるか、ということを書き記述・分析したい。

1. 明治大正期の「喫茶店」とはなにか

ジャンルとして考えることをはじめる前に、「重要」な先行研究を分析・批判しなければならない。1993年に発表された『カフェーと喫茶店』¹²である。著者は初田亨、建築史を専攻している。

発表当時この論考は優れたカフェー研究として評価されたのではあるまいか。その証拠にその後多くの論者によって引用されている。たしかに一見優れた研究である。しかし、この節で検討して明らかにするように、実際には、その後のカフェー研究のつまずきの石ともなっているのだ。

では、実際の問題点をチェックしていこう。カフェー等の建築意匠の研究を除くと、この著作で指摘・主張された「重要」な事柄は、二つある。一つは、主として『東京市統計年表』によって描かれた東京旧市部の喫茶店数の経年変化のグラフとその分析である。¹³ 喫茶店の店舗数の経年変化は、明治31年（1898）から昭和15年（1940）までたどられている。二つ目は、『東京市商工名鑑』や『東京商工名簿』を資料として、昭和初期のカフェーや喫茶店の具体的姿、特にどのような商品・サービスを提供したのかを再構成した記述である。¹⁴ 両者とものに展開するジャンルの視点と関係する。ただ、この論文では、この節で、第一の事柄を再考・批判していこう。

1-1 初田のカフェー・喫茶店研究（1993）の主張点

初田の記述や主張は、理論性が希薄で、論理的操作も稚拙であるために、まとめることが困難なものになっている。とはいえ、喫茶店の店舗数の経年変化に関わる事柄を強引に整序し内容を分節化すると、以下のようなになるであろう。

第一に、『東京市統計年表』では、1898年から1940年まで、旧東京市部における風俗に関する諸営業、あるいは、警察の取締りが必要な諸営業の一つの項目として、「喫茶店」があげられ、その店舗数が把握されてきた。¹⁵

第二に、統計年表での「喫茶店」には、初田が考えるところのカフェーと喫茶店が含まれて

いるが、両者は「最初から別な営業内容をもった飲食店」¹⁶と認識されてきたのではない。最初期の頃は「喫茶店とカフェーを区別して使用することの必要性がなかった」(17)。また、統計上では最後までカフェーの名前は出てこない。

第三に、統計年表上の「喫茶店」の店舗数の推移を検討すると、1898年から1940年までを三つの期間に区別できる。1898年から1907年までが第一期で、統計上の「喫茶店」店舗数は、60～70店で安定している。¹⁸ 1908年以降1921年頃までが、第二期で、「喫茶店」店舗数は漸減傾向を見せ、1918年に最少となり、25店を数えるにとどまった。¹⁹ 1923年9月1日の関東大震災が契機となり、1923年からは、「喫茶店」数が急激に増え、1938年には、3307店を記録し最大値となった。

第四に、1933年に「特殊飲食店営業取締規則」が出されたこともあり、この年以降統計上は、「普通飲食店」に含まれる「喫茶店」と「特殊飲食店」に含まれる「喫茶店」に分割されて店舗数が記録された。初田は、「カフェーの多くが特殊飲食店に入り、喫茶店の多くが普通飲食店に入る」と判断して分析を進めている。その上で結論的に、1933年以降、「喫茶店は増え続けているのに対して、カフェーの方は減る傾向にあった」²⁰と述べている。

では問題点はどこにあるのか。根本的には、このテキスト『カフェーと喫茶店』における歴史に向かう姿勢の欠陥、あるいは、歴史感覚の不在が問題と思われるが、それはおくとして、そもそも1904年に初めて登場した統計年表上での「喫茶店」とはなにか²¹、という問いが第一には欠落しているのである。たしかに、喫茶店・カフェー史を叙述した「第2章 芸術家、インテリのサロン」²²では、「明治37年(1904)には日比谷公園内にも喫茶店が作られ、38年(1905)には、俗に「ウーロン」と呼ばれて親しまれた「台湾喫茶店」が銀座に作られている」²³とし、それらが、店舗数が安定していた時期の「喫茶店」の事例であり、統計年表上の「喫茶店」の具体例であるかのような、書き方をしている。あるいは、そのように読みとることができる。

しかし、あくまで読み取れるのであって、著者が、自ら、自著で扱う「喫茶店」について、特に1922年以前の「喫茶店」について、考察を下してはいない。つまり、その分析は読む側にゆだねられている「問題」なのである。次にこの「問題」への私的な回答を示していこう。

1-2 東京市統計年表がいう「喫茶店」とは何か

さて、初田が言及する1904年に作られた日比谷公園の喫茶店とはどういったものだろうか。そこを分析に糸口してみる。

残念ながら、『カフェーと喫茶店』では、典拠が示されていない。ただ当時の『読売新聞』を検索すると、関係すると思われる記事を見出すことが出来る。1904年に2軒ほど、喫茶店とされるものが、日比谷公園内に開業した、と報道されている。

まず、1904年4月23日の『読売新聞』を見てみよう。²⁴「●昨今の日比谷公園」という見出しで次のような記事が掲載されている。

「一重桜は既に根に反りたれどまだ八重桜は名残を留め目に見ゆる若葉の翠もすがすがしき今日此頃日比谷公園に春の行くへを訪づるも一興なれど同公園には今日までベンチの外一の休憩所なく一寸お茶一服なりと聞召さんにも相応の茶店とてなきは新公園の欠点なりと思はれたるに今回新橋の料理店松本楼にては市役所の許可を得て公園の中央に喫茶店を和洋折衷に建築し来月よりして手軽料理をも調進するとの事」

同年6月2日の『読売新聞』に「●日比谷公園喫茶店 新築落成本日開業」²⁵とあり、前の記事にある松本楼が開店したらしいことが分かる。

さらに同年10月25日付の『読売新聞』にも「●日比谷公園内喫茶店新設」²⁶という見出しの記事があり次のように報道された。

「今回日比谷公園内有楽門の傍らに新設せる三橋亭喫茶店は来る廿九日開店式を挙げ十一月一日より開業する由にて該店は日本風の建築にして百七坪の建坪を有し最も趣味深き優雅なる構造と装飾に注意し整備し日本座敷洋食堂、玉突場、浴場等の設けあり和洋料理、喫茶等の外に寿司、しるこをも販売し殊に庭園は彼の心字池を抱き居れば自ら山水の眺め深く公園唯一の茶店なりと」

要するに、1904年6月に、「公園中央に」位置する「喫茶店」として「松本楼」が、また、10月には、「公園唯一の茶店」とも表現された「日比谷公園内喫茶店」の「三橋亭喫茶店」が開店した。

この二つの公園内店舗についてすこし考察していこう。両者とも「喫茶店」と新聞では名指されている。しかし、内容的に見て、今日の喫茶店概念とは合いそうにない。また、初田が、テキスト内で定義づけている喫茶店とも大きくずれると思われる。²⁷ 松本楼は現在まで続く西洋料理店である。当時は、三階建ての洋館のレストランであったとされる。²⁸ ただし、この点に関する資料には出会えていないので裏付けはない。もう一つの「三橋亭喫茶店」は、「百七坪」で「日本座敷」「洋食堂」「玉突場」「浴場」があり、「和洋料理」「喫茶」「寿司」「しるこ」などを提供する。こうした「飲食遊行商業空間」が、現在の意味で、また、初田の定義で喫茶店といえるだろうか。そうはとていえないであろう。

東京市が1907年に出版した『東京案内 (上)』には、松本楼と三橋亭はいずれも紹介されている。²⁹ その際両者は、「喫茶店」ではなく、「料理屋」と位置づけられている。現在の感覚からするとこちらの方が受け入れやすい。しかし、新聞の例でわかるように、同時代 (1900年代)

においては、「喫茶店」と呼ばれ、そうみなす視線が存在していたことも確かだ。東京市の統計年表上では、日比谷公園がある麹町区で、1903年末には「喫茶店」は5軒であったが、1904年末には6軒と増加している。³⁰「松本楼」と「三橋亭」の新規開店を反映した数値かもしれないが、松本楼が洋館の西洋料理店であったとすれば、1軒増加しているのは、「三橋亭」を意味すると解釈する余地はかなりあるだろう。

では、この事例を見てきて、統計年表上の「喫茶店」は何を指しているのか。その点についての私見を示そう。

統計年表上の「喫茶店」は、今日的意味の、あるいは関東大震災以降イメージとして固まってきた「喫茶店」とは異なるものではあるまいか。そう思える。むしろ、近世の寺社門前の茶店の流れを引くと思われる、遊楽地の茶店の空間ではないだろうか。「松本楼」と「三橋亭」の場合は、新しく出来た日比谷公園における「一寸お茶一服なりと聞召さん」とした折の「相應の茶店」と位置づけられた。特に「三橋亭」は、「公園唯一の茶店」とも記事に書かれ、遊楽地での茶屋・茶店の意味付けがされていた、と解釈できそうだ。

1-3 上野公園の「茶亭」

ところで、1904年出版の『明治三十五年 第二回東京市統計年表』では、東京旧市内15区のうちで、下谷区に統計年表上の「喫茶店」が集中している（1902年12月31日現在）。東京市全体で66軒カウントされ、そのうち下谷区には16軒が存在している（24%）。次が、本所区、深川区、芝区であり、いずれも11軒カウントされている（17%）。³¹

ここで、東京市が1907年に編纂した『東京案内（下）』の「下谷区」の「公園」の記述を見てみよう。³²そこでは上野公園が詳しく説明・案内されている。公園内にある各種の「飲食遊行商業空間」も紹介されており、料理店以外に「茶亭」が示されている。「良元堂」「龍玉亭」「花月亭」「三宜亭」「東花亭」「黄金亭」「桜木亭」「観月亭」の8軒だ。おそらく名前があげられていない「茶亭」もあるのではなかろうか。この「茶亭」は、遊楽地での茶屋・茶店的ものと解釈できそうだ。とすれば、これが、統計年表上の「喫茶店」に当たると推定しても、問題はないのではなかろうか。

もう少し続けよう。1910年3月10日付の『読売新聞』には、「●上野の茶店（ちゃみせ）の恐慌」という見出しの記事が出ている。³³内容はともかく、そこには上野公園内の「茶店」が「韻松、鶯、三宜、良元、花月、龍玉、観月、黄金、花山、東華、桜木等」と列挙されている。11軒以上あったと考えることができる。また、1914年3月13日付の『読売新聞』では、「●公園茶亭の協議△大正博に就て招客法」という記事が出ている³⁴が、公園内に「茶屋は十一軒」とし、「東花、黄金、鶯」「花山、龍玉、良之、三宜、桜木」「韻松」「観月」の名前を挙げている。ちなみに『東

『京市統計年表』で、1914年末に、上野公園がある下谷区の「喫茶店」数は、14軒で、15区中最多、「喫茶店」の東京市内での総計は41軒なので、34%を占めていた。つまり、「茶亭」「茶店」「茶屋」といわれるものが、「喫茶店」と読みとられた可能性が高い、と言えよう。

まとめておこう。『明治三十五年 第二回東京市統計年表』以来、「喫茶店」という項目のもと、カウントされた「飲食遊行商業空間」は、日比谷公園にあった「松本楼」や「三橋亭」、あるいは、上野公園にあった多数の「茶亭」がその具体例であったのではないかとすれば、それは、江戸時代からの流れにある、遊楽地での茶屋・茶店のものであり、今日的な喫茶店とは全く異なる存在であった。したがって、これについての数値を、無批判に、現代の喫茶店のなものの先駆として使用することはできないのである。ただ、初田のあげたもう一つの例、台湾喫茶店は例外であり、開店初期から、統計表上の「喫茶店」にカウントされる可能性は高い。³⁵

1-4 「カフェー」はカウントされたのか

次の問題点は、カフェーについて書かれているエッセイやルポと、初田が示した統計年表上の「喫茶店」の店舗数の推移に矛盾がある、ということだ。特に第二期に注目して見よう。初田は、1908年以降1921年頃までの第二期で、「喫茶店」店舗数は漸減傾向を見せ、1918年に最少となり、25店を数えるにとどまった、と指摘している。³⁶

これに対して、松崎天民が、この「漸減期」に書いた次のような記述はどう考えればいいのか。1916年のことだ。

「カフェーの本場は銀座界隈に限られて居ますが、東京市内は神田、赤坂、牛込、本郷、浅草と今や市内到るところ、何処に行つても、カフェーの無い所はありません。」³⁷

あるいは、初田が、「喫茶店」数が最少になった年とする、1918年に、江口渙は、「近頃市内のカップエは非常な勢で殖え初めた」と述べ、「カツエの隆興時代」と表現している。³⁸ この江口の言説は、『中央公論』の編集部が、「新時代流行の象徴として観たる「自動車」と「活動写真」と「カフェー」の印象」³⁹を当時の新人の文化人に質問したものへの回答として示されたものだ。江口の認識も重要だし、『中央公論』編集部の認識もまた重要だ。何れも、カフェーが増殖している、と捉えているとみてよいだらう。統計年表上の「喫茶店」の漸減と、同じ時期のカフェーの増殖を記録する言説との矛盾、これはどう解決できるのか。

統計年表上の「喫茶店」が、いわゆる茶屋や「茶亭」を主に含む数値であるならば、新しい形態のカフェーや今日からみてイメージされる喫茶店は、統計年表上の「喫茶店」に含まれないはずである。互いにまったく異なる種類の「飲食遊行商業空間」であるからだ。

そうした兆候を統計数値から読みとれるだろうか。

あとで詳しく述べるが、東京でカフェを最初に名乗ったのは、カフェプランタンである、というのが、現在でも一般的理解である。1911年の3月、または、4月に開店した。この年、8月10日に、カフェライオンが開店し、さらに12月12日には、カフェパウリスタができています。何れも銀座においてだ。それ以前からあった台湾喫茶店を加えるならば、銀座に4軒のカフェ、あるいは、喫茶店が登場したということになる。

ところで、『東京市統計年表』の「喫茶店」数を京橋区に限って、1911年から1924年まで見てみよう。

表2：京橋区における「喫茶店」数

1911	1912=T1	1913	1914	1915	1916=T5	1917	1918	1919	1920
1	1	1	1	-	1	1	2	2	2
1921	1922	1923	1924						
3	3	-	6						

この表からまずわかるのは、1911年から1917年まで、京橋区では「喫茶店」が1軒しかない、と認知されていたということだ。おそらくこの1軒は台湾喫茶店である。とすれば、カフェプランタン、ライオン、パウリスタは、カウントされていなかったことになる。

また、1922年には、「喫茶店」は、3軒認知されている。ところで、この年の6月に発行された『東京特選電話名簿上巻』⁴⁰を見ると、「カフェ・バー」のところには、所在が京橋区であるものは、プランタン、ライオン、パウリスタをはじめ、5軒の電話番号が載っている。また、「西洋料理」のところには、京橋区にある「カフェ」を屋号に入れている店が3軒登録されている。うち1軒はライオンなので、重ならないものが2軒ということになる。合計すると京橋区では少なくとも7軒のカフェがあったことになりそうだ。つまり、『東京市統計年表』の「喫茶店」数の2倍以上存在していたわけだ。

これらからどういう解釈が導かれるだろうか。1911年から1924年までの統計年表上の「喫茶店」には、カフェは含まれていない、ということではなかろうか。つまり、最初のカフェとされているプランタンは、統計年表上の「喫茶店」に含まれず、それ以降登場した各カフェも、統計年表上の「喫茶店」とは認知されていなかった。そのため、松崎天民や江口渙や『中央公論』編集部が、カフェの空間の増殖を観測していたちょうどその時に、おそらく茶屋や「茶亭」としての「喫茶店」が漸減していくことを『東京市統計年表』は数値的になぞったのであろう。

1-5 統計年表上の「喫茶店」の正しい位置づけ

初田は、「喫茶店」という言葉だけに着目し、その内実を分析するという作業を怠った。そのため、いわゆる喫茶店やカフェーの日本語文化圏における初期の展開についての定式化を誤ってしまった。その上で、間違った認識を普及させてしまったし、今もさせている。この間違いは、2003年に書かれた論文にも引き継がれており⁴¹、また、前年に林哲夫によって書かれた、好事家ものとしては大変すぐれた著作である『喫茶店の時代』⁴²でも残念なことだが引用されている。

では、『東京市統計年表』上の「喫茶店」に関する数値は、どのように理解するのがよいのであろうか。

第一に、1898年から1922年までの統計年表上の「喫茶店」と1923年以降の統計年表上の「喫茶店」では、カウントされている対象に大きな違いがある、と解釈できる。22年以前の「喫茶店」は、遊樂地での茶屋・茶店的のものであり、23年以降に「喫茶店」にカフェーなどが含まれるようになった。

第二に、1898年から1907年までの第一期で、統計上の「喫茶店」店舗数は、60～70店で安定している。これは公園や遊樂地での茶屋的ものが、定常的にあったことを意味する。それに対して、第二期の1908年から1922年までに「喫茶店」店舗数は漸減傾向を見せているが、これは遊樂地での茶屋的ものが、何らかの理由で、「飲食遊行商業空間」としての人氣が落ちて来た、あるいは、「飲食遊行商業空間」として存続できない条件が広がった、ということの意味するだろう。同時に、この時期、カフェーの着実な増殖があり、松崎天民や江口渙や『中央公論』の編集部は、その増殖現象を感知していた、とまとめられる。

第三に、1923年以降の数値は、カフェーの増殖と対応していると見ることも可能である。また、「特殊飲食店」の「喫茶店」がカフェーで、「普通飲食店」の「喫茶店」が喫茶店である、という初田の指摘は、説得性をもっている。ただ、ここについても、もしかすると、一步踏み込んだ解析が必要かもしれない。ただ、その解析は今後の課題に残さざるを得ない。

以上1898年から1922年まで数値が記録されていた「喫茶店」が、カフェーや喫茶店ではないということが明らかになったと思う。では、そのことを踏まえて、ジャンルとしてのカフェーという視点を次節では考えよう。

2. ジャンルとしてのカフェー

前節で明らかになったように、カフェーを考える場合、東京市統計年表上の「喫茶店」については、1898年から1922年までは、ほぼ無視してよいことになる。というよりも、そこに捉わ

れると歴史の再構成を誤ってしまうことが明らかになった。その点を踏まえて、ここでは、「飲食遊行商業空間」のジャンルということをごく簡単に整理し、その上で、ほかの資料などを使いながら、ジャンルとしてのカフェーについて論じたい。

まず「飲食遊行商業空間」のジャンルであるが、一般的枠組みを少し示したい。

いまの我々から考えて行こう。外食の消費者である我々は、さまざまある個別の店舗を、ジャンル分けして理解し、利用している。いわゆるグルメガイドも、お薦めの店舗をジャンルにまとめて、情報提供している。ネット上も同様だ。たとえば、現在、日本語文化圏には、蕎麦屋というジャンルが存在する。このジャンルは、遅くとも18世紀初めの享保年間、早ければ、17世紀終わりから18世紀初頭の元禄年間には、出現していた、とされる。⁴³ 伝統的なジャンルで、江戸期における都市の発展と関連して登場している。一般的に考えると、都市が発達すると食べる事と食べる物（調理されたもの）の外部化や商品化が起きる。外食の成立・展開だ。外食が展開すると個別飲食店が増え、その飲食店は様々にジャンル化されて行く、と定式化できるだろう。その場合、そのジャンルは、共同的なものであり、社会的なものである。言い換えると、人々がそのイメージを共有しているものであり、また、単に人々の集合に属しているのではなく、社会の側にも属するものである。

では、そうした飲食商空間のジャンルは、どのような要素によって他の外食系ジャンルから区別されるのであろうか。だいたい5点、差異化がなされる際の項目が考えられる。第一に、そのジャンルで主に提供される「食材・飲材とその内容」、これがもちろん中軸をなす項目だ。第二に、その材料などの「調理法・調合法」、第三に、その店舗でなされる「給仕方式」とそこで客がおこなう「食事方法・形式」、第四に、そのジャンルの店舗がもつ「空間性」と「環境性」、そして、第五に、そのジャンルと関わる「コンテンツ」「物語」「イデオロギー」である。

後二者について、もう少し説明しておきたい。第四の「空間・環境性」は、店舗の外観、内装、立地など建築に関わる要素と、その店の雰囲気形成する、光・色環境、音環境、香環境などを指す。たとえば、ファストフード店は、それぞれの企業によって規格化された「空間・環境性」をもっており、しかも、ある種の共通性をもって、ほかの諸ジャンルと差異を見せている、と考えることができる。

第五の「コンテンツ」「物語」「イデオロギー」であるが、そのジャンルと密接に結びついたイメージや言説群を指すと思ってもらいたい。たとえば、明治初期の西洋料理店や牛鍋屋は、「養生」という「コンテンツ」を販売していったのであり、人々も「養生」を食べるためにそこを訪れた。また、同じく「牛鍋食はねば開化不進奴（ヒラケヌヤツ）」という「物語」、あるいは、「イデオロギー」が、そのジャンルに深く刻まれていたといえる。⁴⁴ 人々は、牛肉を通して「開化」や「西洋」を食べ、身体化しようとしていたのである。あるいはファストフードの代表である

マクドナルドを考えよう。規格化された店舗が世界各地に展開してきたが、どのような文化圏に入るかで、マクドナルドの意味付けが変わることが、新聞記事等を見ると明らかであろう。⁴⁵

このように、特定の飲食商空間のジャンルは、それ自身にまつわる「コンテンツ」や「物語」や「イデオロギー」をもっており、それが他のジャンルとの差異化に影響を与える、と仮設可能だろう。

こうした項目からなる飲食商空間のジャンルは、飲食空間を経営する側からも、飲食空間を利用する消費者側からも認識されている。経営者も消費者も、あるジャンルについては、先に示した5つの項目に関して一定のイメージをもち、共有している。ある場合には、ジャンルは、テキストに書かれた、成文化された形をとるが、大抵の場合は、人々の集合的意識として、一定の社会や文化の中に存在しているのだ。要するにジャンルは、共同化され、社会的に構成されている。

ジャンルは、多くは、過去から伝統として継承されるが、内実は、その時代に対応して、変化を遂げて行く。現在の蕎麦屋は、江戸期の蕎麦屋と差異を示すし、大正昭和初期の蕎麦屋からも変容を遂げている。人々から飽きられ、見捨てられたジャンルは、廃れて消えて行き、人々が欲望するジャンルは、新しく誕生する。ミルクホールは今や活字の中にしかなく、メイドカフェは前世紀には無かった。そうした新しいジャンルは、既存のジャンルとの差異と類似の関係の中で形成されてきたであろうし、生成されていくであろう。

以上のような「飲食遊行商業空間」におけるジャンルという枠組みを用い、日本語文化圏でのカフェー史を再構成していこう。

2-1 ジャンルという枠組みで再構成されるカフェー史

日本語文化圏におけるカフェーというジャンルは、1911年に、東京の銀座を主要な場の一つとして生じた。以前から台湾喫茶店は存在していたが、1911年の春に、「カフェー」を標榜したカフェープランタンが開業⁴⁶、8月10日には、同じく「カフェー」を標榜したカフェーライオンが開店した。⁴⁷ 後者は、西洋料理の「大老舗」であった「築地精養軒」が出したもので、安藤更生は、「当時カフェというものが全然なく、ただわずか少し前にカフェプランタンが出来たばかりの時」「銀座街頭に進出したのだから、そこには多分の成算と決心があったに違いない」⁴⁸ と、1931年に回想、推測している。精養軒側の資料というものが手に出来ないので想像であるが、精養軒の経営者は、企業家としてカフェーというジャンルの将来性を読み、それにかけて、ということであろう。そして、同じ11年の12月12日に、これも「カフェー」を標榜したカフェーパウリスタが生まれ⁴⁹、ジャンルとしてのカフェーは、銀座に3つの個別店舗として具体化したのである。

さて、このように捉えると、1910年以前は、カフェージャナルは存在していなかったことになる。もちろんこれまでの日本カフェー史の蓄積では、個別の店舗が発見され記述されてきた。そうした点については、どのように考えればよいのだろうか。

これについては、次のようなとらえ方を仮説的に示しておきたい。カフェージャナル成立以前の状況は、コロニアルなカフェの存在、個別事例としてのカフェの店舗の独立的発生、そして、物質としてのコーヒーの提供の場の発生があった、という枠組みである。それに沿って整理を試みておく。

開港地にカフェがあったという記録がある。⁵⁰ これについては基本的に未解明ではあるとはいえ、おそらく外国人の経営による外国人をターゲットとしたカフェであると思われる。この場合は、日本語文化圏に新しくできたジャンルではなく、欧米における飲食店ジャンルが、植民地的な場に持ち込まれた、と解するのが正しい理解であろう。つまり、コロニアルなカフェなのだ。ジャンルは、本国のものが密輸されているのである。

次に、現在のところ3例ほど1910年以前に個別事例としてのカフェ的な店舗が存在した、としばしば論述される。第一は、可否館である。この個別事例については、資料が残っており、また、かなり詳しい調査もなされている。⁵¹ 残された資料をみると、欧州のカフェをモデルにして、それと似た機能の飲食店、あるいは、場を日本語文化圏にもたらそうと試みたことがわかる。ジャンルという概念を使うならば、カフェ的なジャンルを作り出そうとした、と位置付けることが出来そうだ。しかし、その試みは結局うまくいかず、つまり、可否館的な別の店の発生を誘導することが出来ず、単一事例として終わった。要するにジャンルとしてのカフェを目指しつつ、ジャンル形成は失敗に終わり、単独の店として記憶と記録に残された、ということである。

第二に、本郷カフェーという事例がある。この単独店は、遅くとも20世紀初頭には生まれており、コロニアルなカフェ以外では、現在のところ、初めてカフェーを店名に冠した例とされている。記録的にはあまり残っていないが、寺田寅彦の日記に登場する。⁵² それ以外にこれまで確認された記録をたどっておくと、雑誌『食道楽』の記事で言及されていることがわかっている。⁵³ また、カフェージャナルについての回顧が始まった関東大震災直後、『読売新聞』では、「…「カフェー、プランタン」…より前に本郷のある所にカフェーと云ふ文字が出たことがあると云ふ。…本郷のはどうもハッキリと覚えてゐる人がゐない…」と書かれている。⁵⁴ これは本郷カフェーのことであろう。1925年にはすでにその記憶がかすれつつあったことがわかる。ただ、近藤経一は、1928年時点で、「日本でカフェーと名のられた最初の店」として「本郷カフェー」に注意を促していた。彼のテキストでは、その時点でまだ「同じ場所に存在してゐる」とされていた。⁵⁵

第三に、すでに言及した台湾喫茶店、通称ウーロンがある。これは、1905年に開店したのだが、はじめは、遊楽地茶屋・茶店的「喫茶店」と認識されていたらしい。あるいはそのうちでも「高尚なもの」と位置づけられた。ところが1911年にカフェージャンルが成立した時に、カフェージャンルの一例ととらえられるようになった、と考えることが出来る。そういう意味では、なかなか面白い個別事例ということが出来よう。1931年時点での安藤更生による解説ではこう紹介された。

「台湾喫茶店

有名なウーロン茶だ。銀座で最初に女給を置いたカフェだ。実に日本の女給の元祖なのだ。爾後美しい女給がたくさん出て随分盛んなものだったが、地震後にはすっかり寂れて、昔日の俤はない。女給も二、三人しかいず、晴れた日でも雨が漏るような感じの店だ。しかしこのウーロン茶は相変わらずまい。点心にくれるバナナ入りの菓子もうまい。人を待ち合わせる時などには、この家は大いに利用すべきだと思う。… (後略) …」⁵⁶

安藤は、台湾喫茶店を、「カフェ列伝」では扱わず、「喫茶店月旦」で取り上げた。つまりカフェージャンルではなく喫茶店ジャンルに位置付けた。しかし、引用からもわかるように、「銀座で最初に女給を置いたカフェ」とも書いている。台湾喫茶店の場合、どのジャンルに入るかの解釈が揺れている、と読むことが出来ると思う。あるいは、カフェージャンルと喫茶店ジャンルの差異性と類似性が、明晰になっていない、とも解釈できる。

最後に、物質としてのコーヒーを軸とする場合、コーヒーを提供したとされる店、あるいは、場として、各地のホテル、西洋料理店から油絵茶屋までがあげられることがある。⁵⁷ カフェ的場、あるいは、カフェの先駆とそれらをとらえようとする試みもないわけではないようだ。ただ、この場合も、ジャンルとしてのカフェーというとらえ方をすれば、単にコーヒーという飲料が商品等として提供されたという事実を指すにすぎない。

2-2 ジャンルとしてのカフェー史素描

では、ジャンルとしてのカフェーという把握で、どのような史的再構成がなされるのか、その展開の動態に関する構想をここで素描しておこう。

すでに提示したように1911年にカフェージャンルの起源・出発をみるならば、それ以前はプレカフェー期である。この期間では、カフェージャンルの不在とともにカフェージャンルではない西洋的飲食商業空間の存在がみられるだろう。また、「カフェ」情報の流入・流通という事態がみられる。欧州には「カフェ」というジャンルがあり、そこではどのような飲食がなされ、そこにはどのような「コンテンツ」が結びついているか、といった情報だ。また、何よりコー

ヒーを例とするような西洋的飲料や食材の流通が起きていた。このような三つのモメントが総合されていく中、ジャンルとしてのカフェーが用意されていくのである。

1911年、あるいは、1910年の可能性もあるが⁵⁸、日本の大都市圏において三つのモメントの交差上にカフェージャンルが成立する。カフェーと自らを規定する、また、人々からカフェーと認知される、したがって、「カフェー」を標榜し店名にその記号を取り入れた飲食空間が、個別の店として複数誕生した。これが、ジャンルとしてのカフェー成立の基本的前提だ。そして、あとで詳しく論じるが、ジャンル生成の上で重要な役割を果たすのが、『東京朝日新聞』に、1911年8月27日から9月6日まで連載された「カフエー」というルポである。ここでは、ライオンとプランタンと台湾喫茶店が「カフエー」とされ、ルポされた。これこそが、一般的なメディア上で初めて構成されたカフェージャンルに関する言説である、といえよう。この言説・記事を、カフェージャンル確立のメルクマールとすることが出来る。なお詳しくはのちほど検討する。⁵⁹

ジャンル確立以降、このジャンルをめぐる重要な出来事は次のようになるだろう。

第一は、東京圏以外も含めて、個別店舗としてのカフェーが増殖すること、その上で、カフェージャンル成立以前は別ジャンルの店とされていたものが、カフェージャンルのものと読み換えられていく過程が進行すること、である。カフェーパウリスタ銀座店の出現⁶⁰は前者の、メゾン鴻ノ巣がカフェーと読み換えられるのは后者の、それぞれ典型例といえよう。⁶¹

次に、いくつかの出来事がこのジャンルとの関連で生起してゆく。まず、1921年、女給の学術化が起きる。カフェーに特有の職種である、とこのころまでに認知されるようになった女給が、社会科学の対象とされるようになった。⁶²次が、1923年から25年にかけて、関東大震災発生前後から約二年間である。カフェーと女給が社会問題化し⁶³、ほぼ同時に、喫茶店という新しいジャンルの萌芽がみられるようになる。また個別店舗数が驚異的な速度で増加し、店舗は全国化する。そして、20年代終わりのカフェージャンルの、あるいは、ジャンル内の一部店舗群の、エロ化を経て、風俗警察的な介入を招き、1933年に「特殊飲食店営業取締規則」（庁令第二号）が作られる。この「取締規則」により、カフェージャンルは風俗警察による厳しいコントロールのもとにおかれ、同時にある種の制度化がなされたと位置づけることも可能だ。他方、喫茶店ジャンルも相即的に制度化されたのである。蛇足ではあるが、この体制が、1946年の公娼廃止の際、受け皿として威力を発揮した、と考えることが出来る。（表3）

なお、風俗警察的介入は、各都府県で様相を異にしているのも、さらなる調査は必要である。ここでは、東京での介入を重視している。風俗史的には、常識以前のことであるかもしれないが、リマインドのため付記しておく。

表3：カフェージャンルという視点での日本カフェー史

<ul style="list-style-type: none"> ・1910年以前：カフェージャンルの不在+西洋的飲食商業空間の存在+「カフェ」情報の流入+コーヒー等の流通 ・1911年（あるいは1910年）：都市圏における個別カフェー店舗の開設+『東京朝日新聞』「カフェー」ルポ→カフェージャンルの成立 ・1921年：女給の学術化（社会科学の研究分析対象としての「女給」） ・1923-25年：喫茶店ジャンルの萌芽+カフェー・女給の社会問題化 ・1920年代終わり：カフェージャンルのエロ化 ・1933年：カフェージャンルと喫茶店ジャンルへの風俗警察的介入+ある種の制度化←「特殊飲食店営業取締規則」（庁令第二号）
--

このようにカフェージャンルというとらえ方をすると、そこから検討すべき問題が浮かび上がる。第一に、カフェージャンルが、当時の人々の生活行動圏の中でどのように位置したのか、ということの検討である。つまり、カフェージャンルが都市部で興隆するとき、いわゆるサラリーマン階層が一定の量生み出されつつあった。彼らは、家庭をある場所に持ち、そこから公共交通機構によって職場に通っていた。そうした人々やその他のカフェー利用者にとり、カフェージャンルはどのような機能や意味を持ったのか、ということである。

第二に、カフェージャンルは、そこを利用する人々を、いかに構築していくのか、ということだ。別な表現をするならば、ジャンル・カフェーは、人々をどのような主体にするのか、また、どのように主体化する装置として作動したのか、ということである。⁶⁴

以上の二点に関しては今後の課題としておこう。したがってこの論文では指摘するにとどめ、考察はしない。

なおつづく第3節では、ジャンルとしてのカフェーの生成を、資料をもとに詳しく見て行く。さらに第4節では、これまで、カフェージャンル生成の記述は、東京中心で、せいぜい大阪を対象とするに過ぎなかったこともあり、京都を主な対象地として、カフェーの生成展開を考えていく予定だ。（以下次号）

文献と註

- 1 カフェーロイヤルに関しては、『ある映画監督 — 溝口健二と日本映画』で、「溝口健二が徹夜撮影で留守」の時、千恵子夫人が、「遊びにきたジミーを誘って」ダンスにいった「新京極のロイヤルダンスホール」として言及されている。1920年代後半のこと。

新藤兼人『ある映画監督 — 溝口健二と日本映画』岩波書店（岩波新書）、1976、p.78.

- 2 カフェーギオンについては、『京都の歴史8』で「東洋亭のギオンカフェー」として言及されている。年代的には特定されていない。

京都市編『京都の歴史 8 古都の近代』学芸書林、1975、p.560.

- 3 カフェータワーについては、『秦テルヲの軌跡 — そして竹久夢二・野長瀬晩花・戸張孤雁…』で、1913年末に「バンカ・テルヲ展」を、1914年末に「第4回テルヲ氏作品展覧会」を開催した会場として言及されている。

笠岡市立竹喬美術館・練馬区立美術館・京都国立近代美術館・日本経済新聞社編『秦テルヲの軌跡 — そして竹久夢二・野長瀬晩花・戸張孤雁…』日本経済新聞社、2003、pp.218-219.

- 4 和田博文『テキストのモダン都市』風媒社、1999.

- 5 佐藤守弘編『ポピュラーカルチャー研究・カフェ』京都精華大学表現研究機構、2008.

- 6 西野淑美「記号としての「カフェ」」、遠藤知巳編著『フラット・カルチャー 現代日本の社会学』せりか書房、2010、pp.54-61.

- 7 瑣末な問題とはいえ、無視していいものではない。

たとえば、一般的には、銀座における最初のカフェー、あるいは、はじめてカフェーを標榜したカフェーブランタンが、日本語文化圏でも初めてカフェーを名乗った店舗と了解されている。1911年の春のことだ。(3月か4月であるが、いつかを確定できる資料が今のところない模様だ。)しかし、すでに本郷カフェーという店があったことが知られており、これに関してはネット上で様々な資料の発見が報告されている。研究的にというよりも好事家的にという乗りで知識が蓄積されている。この論文でも、本郷カフェーに関して、それらのブログ上の記載や情報を利用させていただいている。

「神保町系オタオタ日記」(jyunku)

「寺田寅彦と謎の本郷カフェー」(2006年9月23日) : <http://d.hatena.ne.jp/jyunku/20060923/p1> (2011年4月16日最終アクセス)

「神保町系オタオタ日記」(jyunku)

「カフェー発祥の地としての本郷(その1)」(2006年12月20日) : <http://d.hatena.ne.jp/jyunku/20061220/p1> (2011年4月16日最終アクセス)

「神保町系オタオタ日記」(jyunku)

「カフェー発祥の地としての本郷(その2)」(2006年12月21日) : <http://d.hatena.ne.jp/jyunku/20061221/p1> (2011年4月16日最終アクセス)

「古書の森日記 by Hisako — 古本中毒症患者の身辺雑記」(黒岩比佐子)

「「本郷カフェ」発見!」(2007年9月24日) : <http://blog.livedoor.jp/hisako9618/archives/51068777.html#> (2011年4月16日最終アクセス)

また、カフェーブランタンとくらべて大阪のカフェーキサラギの方が早く出来たのではないかという

証言もあるが、確たる資料的裏付けはない。むしろカフェープランタンなどに追随した、と解釈するほうが妥当のような気がする。ただし、それについても確たる資料を示せるわけではない。

- 8 年表について若干の説明を加えておく。

「可否茶館」に関しては以下の文献を参照している。

星田宏司『黎明期における日本珈琲店史』いなほ書房、2003.

星田宏司『日本最初の喫茶店『可否茶館』の歴史』いなほ書房、2008.

本郷の青木堂に関しては以下の文献によった。

林哲夫『喫茶店の時代』編集工房ノア、2003.

東京市の69軒の『喫茶店』に関しては、註11の文献を参照している。

「カフェー・キサラギ」の開業に関しては、以下の文献と註10の文献を参照している。永井（註10）によれば、開業に関しては、第一に「明治43年開業説」がある。村嶋歸之の証言・テキストが根拠のようだ。村嶋自身は典拠を示していないという。第二に「明治44年2月開業説」がある。永井によれば、熊谷奉文の『大阪社交業界戦前史』に書かれているという。ただ、こちらもどこからの情報かは不明である。もう一つは、「明治45年初頭説」である。これは以下の明石の論文による。ただ明石も「四十五年初頭らしい」という記載であり、資料的な裏付けを示してはいない。ちなみに、キサラギの次に大阪で開業したのは、新世界のミカド、または、道頓堀のパウリスタ（ポーリスタ）というのが定説である。ミカドとパウリスタはほぼ同時に開店した、とされている。この少し後に千日前戎橋近くにカフェーナバが出来たとされている。なお、道頓堀のカフェーパウリスタは、1912年（明治45年）1月26日開業という。この件に関しては、長谷川泰三が著した『日本で最初の喫茶店「ブラジル移民の父」がはじめたカフェーパウリスタ物語』（文園社、2008）によっている。

明石利代「大阪の近代文学」、小島吉雄編著『大阪の文芸』毎日放送、1973、pp.283-370.

- 9 吉見俊哉『都市のドラマツルギー — 東京・盛り場の社会史』河出書房新社（河出文庫）、2008、p.233.

吉見のこの著作は、1987年に弘文堂から刊行されている。

- 10 以下の論文を基礎文献とし、いくつかの論考を参照して整理した。

永井良和「解説 — 近代都市文化と「大阪カフェーの東征」」、津金澤聰廣・土屋礼子『カフェー考現学 大正・昭和の風俗批評と社会探訪 — 村嶋歸之著作選集第1巻』柏書房、2004、pp.445-460.

- 11 以下の論文も参考にした。ただ、残念なことに、問題意識は非常に明確で重要と思われるにもかかわらず、資料収集や資料分析、資料操作に失敗している。

この論文では、しかし、カフェー史に関する年代区分の提案がある。以下の通りだ。

第一期：カフェーの出現期：1911年～1914年

第二期：カフェーの普及期：1915・6年～1923年（9月1日）

第三期：カフェーの乱立期：1923年（9月1日）～1929年

第四期：カフェーの飽和期：1930年～1933年前期

第五期：カフェーの衰退期：1933年後期～1941年12月

村田瑞穂「近代日本におけるカフェーの変遷」『史窓』64、2007、pp.45-53.

- 12 初田亨『カフェーと喫茶店』INAX出版、1993.

なお、本論文で使用している『東京市統計年表』は、国立国会図書館が提供している「近代デジタルライブラリー」を通してネット上から参照した。

- 13 同上、pp.5-10.

- 14 同上、pp.25-31.

- 15 同上、pp.5-8.

- 16 同上、p.5.

- 17 同上。

- 18 同上、pp.7-8.

第一期、第二期という用語は初田のものではなく、まとめる際につけたネーミングだ。関東大震災以降は第三期とすることができる。つまり、『東京市統計年表』での「喫茶店」店舗数変遷は、第一期＝安定期、第二期＝漸減期、そして、第三期＝激増期に分けられる。

- 19 同上、p.8.

- 20 同上、p.10.

前掲論文、註10、pp.455-456.

- 21 「東京市統計年表」に「喫茶店」数が記録されるのは、第二回の統計年表からである。そこには、「明治三十五年十二月三十一日現在」（1903年末現在）と記された表があり、区ごとの「風俗ニ関スル諸営業」の店舗数が記載されている。また、明治31年（1898年）から明治34年（1902年）までの、「全市」の「喫茶店数」も付属の表で示されている。

東京市役所庶務課『明治三十五年 第二回東京市統計年表』東京市、1904、pp.423-424.（「近代デジタルライブラリー」を利用）

なお第一回の「統計年表」の書誌は以下の通りである。これには、「風俗ニ関スル諸営業」の統計表はない。

東京市役所総務部庶務課『明治三十四年 東京市統計年表 第一回』東京市、1903.（「近代デジタルライブラリー」を利用）

- 22 前掲書、註（12）、pp.11-15.

- 23 同上、p.11.

24 「●昨今の日比谷公園」『読売新聞』1904年4月23日号。

なお、日比谷公園は1903年6月1日開園。

『東京朝日新聞』の資料は今回はほぼ利用しなかった。ただ、以下に、概要は記しておく。

1903年3月15日号では、「園内」の「休憩所」に関しては、「洋食店一棟、和食店一棟、喫茶店一棟の他に当分の間植木職業者の喫茶店を置く筈」と市の方針を伝えている。

1903年9月12日号では、市の参事会で決定された「日比谷公園入札人心得」と「日比谷公園地使用許可条件」を掲載。「入札人心得」には、「第一条」で「公園内茶店」として「西洋喫茶店」と「和風喫茶店」の二つを考えていることを示し、「第二条」では「喫茶店、珈琲店、…」の営業者に入札できる者を限定している。

1903年9月22日号では、入札の結果が報じられている。また、翌23日号で「落札者の確定」を報じた。

1904年2月3日号は、洋風の喫茶店に認可がおり和風店も近日認可されると伝えている。

1904年5月21日号は、松本樓の喫茶店が5月中に落成し、6月1日開店予定であることを報じた。

1904年6月4日号では、松本樓の喫茶店が5日開業と伝える。構造は「和洋折衷」とあり、「三階建ての洋館のレストラン」とHPではいわれているが、それと同じかどうか問題が残る。註(28)を参照のこと。

1904年6月10日号には、松本樓による広告が掲載された。そこには「日比谷公園 喫茶店開業」と書かれ「松本樓支店」とも明記されている。つまり、松本樓自体が、この日比谷の支店を「喫茶店」と認識していたことがわかる。

引用に関しては、旧字は出来る限りそのままにし、漢字に関しては適宜新字を採用してある。この論文全体および次号論文に関しても同じである。

25 「●日比谷公園喫茶店 新築落成本日開業」『読売新聞』1904年6月2日号。

26 「●日比谷公園内喫茶店新設」『読売新聞』1904年10月25日号。

なお、『東京朝日新聞』（1904年11月3日号）にも、「日比谷公園／三橋亭喫茶店」の広告が載っている。それによれば、開業は「十一月一日」、建築は「優雅の日本風にて浴場の設けもあり」で、庭園もある。娯楽は玉突きと新聞縦覧。営業内容は「茶菓、西洋料理、日本料理、寿司、しるこ、牛乳、キリン（生ビール）「和洋酒類各種」であった。『読売新聞』と差異はない。

27 初田のテキストは、理論性と論理性が欠如しているので、まとめるのが難しい。そのため、喫茶店の定義についても、つかみにくい。ただ、第1章の初めに次のように記している。これはカフェーとの差異を示しながらの定義だが、ここではカフェーの方の記述は省く。

「喫茶店は、時にアルコールのサービスもするが、椅子やテーブルを備えた空間とともに、コーヒー、紅茶、ジュースや、パン、ケーキなどの軽い飲食物を提供する店」(p.5)、「喫茶店では女給が店の中心な役割を果たしてはいない」(p.5)、「アルコールを中心としないところが喫茶店」(p.5)

以上の記述を、「松本楼」や「三橋亭」に適用可能かどうか考えてみよう。特に「三橋亭」の場合はほとんど重なりがないように思われる。

- 28 松本楼はHPによれば、1903年6月1日に、日比谷公園の開園とともに開業したように記載されているが、それは間違いであることが、今回の研究遂行過程で明らかになった。引用した『読売新聞』からもわかるが、松本楼は、1904年6月2日の開業、というのが正しい。ただし、『東京朝日新聞』では6月5日開業とされている。

また、開店当時「三階建ての洋館のレストラン」だったというのが、資料的裏付けには行きあたっていない。

「森のレストラン日比谷松本楼」

「松本楼の歴史」：<http://www.matsumotoro.co.jp/> (2011年4月16日最終アクセス)

なお、註(24)も参照のこと。

- 29 市史編纂係『東京案内(上)』裳華房(東京市役所)、1907、p.404.

(「近代デジタルライブラリー」を利用)

- 30 前掲、註(12)、『東京市統計年表』。「近代デジタルライブラリー」を通してネット上から参照。

- 31 同上

- 32 市史編纂係『東京案内(下)』裳華房(東京市役所)、1907、pp.431-448.

(「近代デジタルライブラリー」を利用)

- 33 「●上野の茶店(ちゃみせ)の恐慌」『読売新聞』1910年3月10日号。

- 34 「●公園茶亭の協議 △大正博に就て招客法」『読売新聞』1914年3月13日。

- 35 前掲書、註(12)、『カフェーと喫茶店』、pp.11-12.

「喫茶店」という言葉自体の登場に関しても実は考察が必要である。しかし、この論考で扱う余裕はない。ただ、おおよその状況は示しておく。1892年ごろに、海外の博覧会で、日本の「茶」を博覧会来場者に提供し、日本の「茶」の認識を高め、ひいては輸出しようという計画が茶業組合でつくられた。その時、「茶」を供する場に、喫茶店という名称が与えられた、というのが、喫茶店という言葉がひろまるきっかけと思われる。1893年にシカゴで開催された博覧会で、この喫茶店が開業・営業し、かなりの盛況であった。

- 36 正確な引用は次の通り。

「喫茶店の数は、明治30年(1897)頃から40年(1907)頃にかけて60～70店くらいでほぼ一定しているが、以後、大正10年(1921)頃にかけて漸減傾向を見せており、大正7年(1918)には25店にまでなっている。」

同上、pp.7-8.

- 37 松崎天民『漂泊の男流転の女』弘学館、1916、p.284.

(「近代デジタルライブラリー」を利用)

- 38 江口渙「無題」『中央公論』1918年9月号、pp.84-87.

- 39 中央公論編集部編「新時代の流行の象徴として観たる「自動車」と「活動写真」と「カフェー」の印象」『中央公論』1918年9月号、pp.67-96.
- 40 三友協会調査部編『東京特選電話名簿上巻』三友協会、1922。
〔近代デジタルライブラリー〕を利用
- 41 初田亭「近代東京の消費空間 — 街歩きを楽しむ人々の出現と喫茶店」『年報都市史研究』Vol.11、2003、pp.28-41.
- 42 前掲、註 (8)、林哲夫『喫茶店の時代』編集工房ノア、2003.
- 43 植原路郎・薩摩卯一『そばの本』(日本料理技術選集32) 柴田書店、1981 (原本出版1969)、pp.162-163.
- 44 仮名書魯文『安愚楽鍋』岩波書店 (岩波文庫)、1967 (原本出版1871-72)、pp.27、112。
なおこの点に関して、以下の論文が重要である。
川村邦光「洋食とは何か? コンセプトとしての“洋食”の発生と展開」『Vesta: 食文化のひろば』第72号、pp.2-5.
- 45 マクドナルドは、例えばイスラム圏では、欧米文明の象徴として攻撃され、イギリスでは、アメリカの軽薄な傾向の象徴とされ、欧州大陸では、地球環境問題の根源として批判されたり不健康な食文化の扇動者とみなされたりする。この点などに関しては、以下の論文で若干考察している。
斎藤光「国際文化・試/私論」『論叢 (秋田短期大学)』第53号、1994、pp.7-15.
- 46 カフェープランタンに関しては多数の文献が残されている。したがって、その文献の目録等が必要であるが、残念ながらそれに類するものには出会っていない。存在する可能性はあるが、現時点では探しあてていない。
開店の月日を特定できる資料は現在のところないようである。一応以下の論文を典拠としてあげておく。
松山省三「カフェープランタン創業の頃」『文化集団』1934年6月号、pp.37、50-51。
そこにはこう書かれている。
「私が始めて現在のカフェーフ (ママ) ・プランタンといふ新商売を始めたのは明治四十四年の四月だった。」
- 47 「カフェーライオン開店御披露」(広告)『東京朝日新聞』1911年8月9日号。
「来十日開店」とされている。
- 48 安藤更生『銀座細見』中央公論社 (中公文庫)、1977 (原本出版1931)、p.80。
精養軒は、1907年に開催された東京勸業博覧会でも店舗を出していた。この時の経験が、1908年頃に新橋ビヤホールの経営に関わる時に生かされたようだ。そこでの経験が、さらに、「ライオン」のカフェーとしての開業と経営へとつながったと思われる。なお新橋ビヤホールは「カヘーシンバシ」とも1909年時点で名乗っていた。しかし、カフェージャンルが成立していないために、ピアホールジャン

ルの個別店舗と認識されていたと思われる。(次号掲載予定の本論文の後半部を参照のこと)

- 49 「コーヒ店開業 カフェー パウリスタ」(広告)『東京朝日新聞』1911年12月12日号。
 「●本店は十二月十二日より世界のコーヒ本場生粋の南米ブラジルコーヒを発売す」とされている。
- 50 前掲論文、註(10)。
- 51 前掲書籍、註(8)、以下に再掲。
 星田宏司『黎明期における日本珈琲店史』いなほ書房、2003。
 星田宏司『日本最初の喫茶店『可否茶館』の歴史』いなほ書房、2008。
- 52 寺田寅彦の日記に本郷カフェに関する記載がある。
 1909年9月10日の項に「…帰途本郷のカフェにて堀見に会ふ」とある。
 同年9月28日の項に「本郷カフェへ行く」とある。
 1910年1月9日の項に「本郷カフェによりたれば年玉とてタオル一枚貰ふ」とある。
 同年1月14日の項に「弥生亭に昼食…夜本郷カフェに行きたるに田岡に逢ひ共に下宿に行く」とある。
 同年2月6日の項に「夜談話会あり。欠席の積りにて帰途本郷カフェに寄りたれば友田先生来合せ共に出席す」とある。
 同年6月3日の項に「本郷カフェに行く 上田徹と会ふ」とある。
 同年9月23日の項に「本郷カフェに行く」とある。
 1911年2月6日の項に「本郷カフェにて昼食」とある。
 1912年9月3日の項に「夕方本郷カフェにて紅茶呑む」とある。
 寺田寅彦『寺田寅彦全集 第18巻』岩波書店、1998、pp.226、231、245、247、253、269、277、288。
 同上『寺田寅彦全集 第19巻』岩波書店、1998、p.16。
 この件に関しては、前掲のブログのテキストを参考とした。
 前掲ブログテキスト、註(7)、「寺田寅彦と謎の本郷カフェ」(2006年9月23日)。
- 53 無署名「学生の食道楽」『食道楽』第3巻第7号、1907、pp.71-74。
- 54 無署名「カフェー漫話(一)」『読売新聞』1925年11月12日号。
- 55 近藤経一「「カフェーの話」変じて「カフェーと活動写真の話」となる」『女性』第13巻第5号、1928、pp.93-97。
- 56 前掲書籍、註(48)、p.110。
 台湾喫茶店の開店は、1905年12月28日であるようだ。場所は「新橋竹川町大通」とある。以下の新聞記事を参照のこと。
 「●台湾喫茶店の開設」『東京朝日新聞』1905年12月26日号。
 次のような記載もある。
 「従来の売茶店とは異り頗る高尚且軽便にして紳士淑女の休憩に適する様仕組たる由」

ここでいう従来の売茶店とはどういうものか考える必要がありそうだ。明治期の「喫茶店」が「従来の売茶店」ではないかと解釈できるかもしれない。

また、『東京朝日新聞』1907年8月19日号では、台湾喫茶店が近々「京橋区尾張町二丁目」に移転することを報じている。これを参考にすると、1907年の夏から秋にかけて、尾張町に進出した、と考えてよいのではなかろうか。

57 前掲書籍、註 (8)、42。

58 大阪における最初のカフェの出現が確定していないので、こうしておいた。

59 この記事は「大食漢」と署名されているが、松崎天民のことである。松崎天民の著作、『人生探訪』（磯部甲陽堂、1913）の、41頁から61頁に、『東京朝日新聞』に連載されたルポ「カッフエー」が再録されている。（関連連載である「バーとホール」は、続いて62頁から79頁まで、『人生探訪』に再録されている。）ざっと見たところ、全体で数カ所の微細な異同があるが、内容等に関係する部分はない。『人生探訪』に再録されたものは、2001年に、坪内祐三（筑摩書房）の編集で『東京カフェ探訪』（<リキエタス）の会）にさらに再々録された。この時、坪内は、「カッフエー」の初出には言及していない。2010年に「探訪記者松崎天民」の第三弾を雑誌『ちくま』に連載開始した坪内は、第9回の「変り行く都市風俗をレポートする天民」で、この「カッフエー」を取りあげている。しかし、そこでも初出の記載はない。坪内のスタイルを考えると、初出が確定していたならばそれを示しそこから考察を展開することが多い。それが見られないので、初出は未詳であるか、他の機会に使うため公開していないのではないかと思われる。したがって、「大食漢」が松崎天民であるということ、および、『東京朝日新聞』における「カッフエー」初出の確定についてここに記しておく。細かい情報は、次号参照のこと。

60 前掲新聞、註 (49)。

61 「メゾン鴻ノ巣」をカフェーと見なすかどうかは大きな問題であるが、ここでは、カフェージャンル登場後に、カフェーとして再定義された、と解釈する。

たとえば前掲新聞記事（註 (54)）の書きぶりを見ておこう。

「…（前略）…鴻の巣は今こそソプラントやライオンなどと変わらない経営ぶりであるが当時銀座でおさへてみた三階建の清新軒や風月などと同じ式のレストランで、洋行帰りの故奥田氏が鮮やかなフランス料理を売物にしてゐたのだから、カフェーの元祖と呼ぶのを避けた方がいゝだらう。」

ここでは、メゾン鴻ノ巣は、もともとはレストラン、あるいは、西洋料理店ジャンル・カテゴリーであった、という認識を示している。それが、1925年時点では、カフェージャンルに入る、としてもいる。その理由としては、「経営ぶり」の変容をあげている。

なお「メゾン鴻ノ巣」に関しては以下の参考文献がある。

奥田万里「祖父駒蔵と「メゾン鴻ノ巣」」、奥田万里『祖父駒蔵と「メゾン鴻ノ巣」』かまくら春秋社、2008、pp.74-87。

奥田万里「文士憩う東京初のカフェ」『日本経済新聞』2008年10月1日号。

- 62 建部遯吾・鷺尾浩『風俗問題』冬夏社、1921.

鷺尾は、私娼に「転落」する職業の一つとして女給を考えているように読める。

この路線は権田保之助に継承された。以下の書籍を参照のこと。

権田保之助『社会研究／娯楽業者の群』実業之日本社、1923.

なお「女給」にも、初期はカフェの女給の外、活動写真館の女給も存在していた。また、女給は、初めから娼妓、芸者の延長に位置づけられていたわけではないと思われる。

活動写真館の女給に関しては、以下の新聞などを参照。

△△生「浅草小話 女給物語」『読売新聞』1916年2月20日号。

- 63 現在のところ、1925年4月24日に、本郷の「洋食店彌生軒」で起きた帝大生殺人事件が、カフェや女給の社会問題化のきっかけではなかったかと考えている。たとえば、1925年6月12日付の『読売新聞』に掲載された「カフェの女 二万八千人」という記事では、警視庁がカフェの取締の「下調べ」をおこなっていることを報じているが、記事の出だしで、警視庁が「先だつて本郷で起つた帝大生殺し以来種々な犯罪がカフェやバー等の飲食店から起るとにらん」でいる、としている。

- 64 宇城輝人「ひとりで食べるひとたちの場所」、遠藤知巳編著『フラット・カルチャー 現代日本の社会学』せりか書房、2010、pp.78-85.

宇城によれば、1760年代にパリに登場した「レストラン」は、都市における個人化と社会化をなす空間装置となったという。独りで食べるというレストラン空間の成立は、共同体から個人を析出するとともに、都市的な公共性や連帯の基盤をも作った。つまり、個人的であり連帯的な主体を構成する装置としてレストランがあった、と見なせるという。これに対して日本では、17世紀半ばに江戸を中心に「一膳飯屋」や「煮売茶屋」という個別空間およびジャンルが成立する。そこでは、江戸のジェンダーアンバランスとも関係して、単身者という主体を析出した。このことは、現在の日本語文化圏の食問題と深くかかわるという。

関連して、飲食遊行空間の比較文明的な見取り図は、以下の論考が簡潔に示してくれる。ただ典拠や資料がわからないのが残念である。

石毛直道「料理屋の出現」『食卓の文化誌』岩波書店（同時代ライブラリー）、1994、pp.254-260。（原著は1976年出版）

石毛は、ソバ屋の出現を寛文年か、17世紀中ごろとしている。この件に関しては、註（43）の文献と関係。